

第七講 新石器時代における生産文化と後期新石器時代

小レポート課題：テル型とポリス型の集落の特徴について論ぜよ。

工芸の専門化

或る人々が他人が行わない技術を行使し、その産物が生産者から非生産者へと移される、或いはコスタンの言葉を借りれば、「或る特定の財の消費者より生産者が少ない場合にはいつでも、専門化された生産を我々は目にするのである。」>この規定は狩猟-採集社会に於いても専門化が存在するのを認めている。実際「専門家」はいつでも存在して来たということを確認することが重要である。

石器

前期新石器時代と中期新石器時代

- ・素材原料は外からもたらされたもの（主として、蜂蜜色をした火打ち石と高品位の碧玉を含めて、黒曜石）
- ・生産物の使用は実用性にに基づいている。
- ・生産物はギリシア全体に様式上の刻印や技術的な等質性を示してはいない。
- ・生産物は遠方にまで広範囲に広がっており当該時期の流通している全体量は（特定の遺跡で発見されているものと比較して）重要である。
- ・遺跡の中及び遺跡間の分布は均等である。
- ・生産物は部分的に加工されたもの或いは完成品として遺跡の中に持ち込まれるのであって、決して原材料としてではない。
- ・知識と技術の水準は外からもたらされた原材料から作られたものと地方の原材料から作られたものとの間には驚くほどはっきりとした違いがある。

外からもたらされた原材料に関しては産地での調達法と生産の方法の両方に専門化された活動のあらゆる特徴を示している（航海や／或いは採掘に含まれる技術と知識、技術を習得する為の見習い期間の長さ、一人当たりの高い生産性、失敗の無さ）。証拠はギリシア中の居住地に

完成品を供給する専門化した遍歴碎石人を強く指し示している。

後期新石器時代

原材料を獲得するのに用いられる戦略と薄片にする技術の両方において、後期新石器時代の間には鮮明な地域差が現れる。

・メーロスの黒曜石は西部及び中部マケドニアに到達したが、少量で主に完成品としてであった。高品位の火打ち石も又重要であり、地方の原材料も又同じように利用された。

・テッサリアや中部ギリシア（エウボイアを含めて）輸入された原材料は支配的であり続けたし、生産の機構は根本的には変わらないままであった。

・対称的に、南部ギリシアでは、黒曜石の割合は増加するが、加工技術の水準は非常に多様である。

・南部では、違った方法が同時の利用され、様式毎の「地域」が現れた。

・さらに南部では、黒曜石は様々な状態で（原材料として、荒く割られ塊として、加工された石核として、云々）遺跡に持ち込まれた。

このような状況は、今ではその幾つかの島々に人々が入植しているキクラデス諸島間の航海の増加によって、そして専門化した調達によって競争状態に陥った「直接供給ゾーン」の発達によって、説明される。

「直接供給ゾーン」の中では低い水準の加工技術がしばしば明らかであり何らかの地元産の出現を示している。かくして状況は以前より以上に多様化してくる。しかしながら、逆説的ではあるが、傾向はより一層の専門化に向かってではなく、或る程度までの「脱専門化」を含む複雑な状況に向かって進んでいく。

土器

土器の原材料の調達、生産、分配それに消費の環境は石器とはかなり異なる。

前期新石器時代

・土器は、地方の原材料を利用して、あらゆる遺跡で局地的に生産される。

- ・陶工は単純な方法と技術を使用するが、これらは労働集約型である。
- ・ペロポネソス内部では、部分部分が別々の、即ち違った原材料と、仕上げと焼成の方法、それに異なった製作者によって作られた、製品がつねに現れている。しかし器形や、大きさ、製品と関連する使用法においてははっきりとは異ならない。
- ・全体的な生産は低く、フランクティでは年間 12 個から 13 個という僅かな量の土器が生産された。
- ・生産規模に必要な人数以上の陶工がおり、余りにも少なすぎて自家消費に必要な自家生産を示してはいない。
- ・自家での、「実用性に基づく」使用確実には証拠付けられない。
- ・様々な土器が遺跡の中に一様に分布している。
- ・土器は局地的に「消費」され、地域内での土器の交換を示す証拠は非常に限られており、長距離交換に関してはさらに少ない。
- ・何らかの地域毎の様式上の違いは明白である。

中期新石器時代

- ・土器はなお地方の原材料から作られてはいるが、少なくとも南部では、粘土の共通する調整法はあらゆる遺跡の陶工の間で分け持たれている。
- ・大抵の陶工は熟練した技術者であり、創造性に富み、危険を進んで犯そうとする操り手である。技術や、知識、熟練度、経験の水準は専門化した陶工の存在を示している。
- ・生産規模は増大しているが、それでもフランクティでの年間 100 個以下という全体の生産量を勘案すると、未だ少ない。生産はなお労働集約型であり、それぞれの土器が独特の特徴を有している。
- ・生産物の 90%は「精製土器」であり、そのうちの 25%は精緻に模様が施されている。数個の貯蔵用の壺と同じように、数個の料理用の土器が MN 期に初めて現れる。
- ・分配は遺跡の中や遺跡の間ですら行われていた。
- ・技術的様式的発展はそれぞれの地域中共有されているが、土器の地域内及び地域間の交換は限られている。

・強い地域毎の様式上の相違は明らかである。

後期新石器時代

・全体的に、様式地域はますます小さくなります増す数が増えて行った。

「商品」や装飾様式の数は増加し、多くは（灰色地の上に灰色の上薬をかけたものや、様々な多彩土器、局地的な鈍彩土器）はかなり限られた地域で生産された。

・幾つかの「土器」（黒色磨研土器や、後には、鈍彩土器）は非常に広範囲に（全ての地域で）分布しているが、これらの土器がそれぞれの遺跡で局地的に生産されたのか、それとも限られた生産地からもたらされたのかは明らかでない。

・ペロポネソスでは、生産規模は劇的に減少している。しかし、北部では規模は増加しているようにみえる。

・土器の地域間の遠距離交換は証拠付けられるが均等ではない。ペロポネソスでは、隣り合った遺跡ですら同じ土器を共有することはない。

・粗製／精製土器比率は南北ともに 30-40%にまで増加している。それは恐らく家庭内での土器の使用の増加を反映しているのであろう。

生産、分配それに消費のパターンは中期新石器時代のものと比べて全く異なっていることが明らかである。原材料の調達ですらかなり重要な役割を演じるようになっていた。というのは最初後期新石器時代の土器の顔料として使用された酸化マンガンは容易に手に入りにくい、外国産の原料であった。石器の場合と同じように、ギリシア各地での土器の生産と消費は後期新石器時代以降違った道筋を辿った。確かに後期新石器時代におけるテッサリアでの土器の生産量全体は発掘で発見されている僅かな量とは対称的にそして集約的に調査されているペロポネソスの部分においてすら驚くほどの対称を成している。

終末期新石器時代に於いては、粗製／調理用土器は増加し続け、実際それらは支配的な土器と幾つかの地では 95-100%にまで達する迄-支配的な土器となった。これらの粗製土器は構成、形状それにそれらが生産される技術水準において実に多様であることを示している。